

このほかに、福島市の故小野崎正明弁護士の遺志により、子息芳正氏から寄贈を受けた法律関係の図書、雑誌は合計2万冊あり、4月搬入し、とりあえず今年度は書目を作成し、寄贈手続きを完了した。その内容は法律関係図書、雑誌、判例集、一般図書等で、

図書扱いとしたもの	4,049冊	6,591,070円(評価額)
雑誌	16,003冊	3,335,800円

となっており、明年はこの整理作業に当たらなければならない。その主なものとしては、

大審院民事判決録(縮刷版)	10巻	25万円
刑事	()	12巻 25万円
法学協会雑誌(明治19年から)		50万円 等

法学部を有する大学図書館でも無い貴重なものが含まれている。評価額は神田市場の価格をもって算出した。

第3節 館内奉仕

図書館奉仕の重要な部分を占める、児童に対する奉仕をやはり独立すべきであるとの考えに立って、一階正面軽読書コーナーをこれにあて、軽読書コーナーは、二階新聞閲覧コーナーといっしょにした。これによって、現館舎の利用体形としては、もっとも、効果的な形になった。更にグループ利用の談話室も公開図書室の隣りに配して独立させ、館外奉仕の書庫部に相当する部屋を、事務室に隣接させて運営を円滑にした。

図書館の部屋の配置は、利用者がいかに便利に利用できるかということを中心に考えてなされることは当然であるが、20年前に建てられた現館舎の構造をもつては、利用者フロア、書庫スペース等、その機能をじゅうぶんに発揮するには狭いだけでなく、業務の流れをスムーズにするための、職員の居住性ということからも、これからの図書館サービスに即応できる館舎の新築が急務であろう。

1 利用状況

昨年に比し、大きな変動はみられないが、児童室を独立させることにより、また寄贈による大幅な新しい資料配架のために、児童書の利用が増えていること、調査相談室の利用がのびていることが目立っているが、人員はほとんど変わっていない。

利用の中心をなす館外個人貸し出しについてみると、公開図書室の冊数は、一昨年の52,220冊から48,113冊に落ちている。これは、資料の新鮮さが失われていることにもあるだろうし、また最近の公共図書館の貸し出し冊数、期間等が数冊で2週間というところもでてきていることから、資料の新鮮さに加えて、こうした方法論をも変えて行かなければならないであろうと考えられる。

また、登録人員にしても4,000人台というのが、ここ数年の動かない数字であり、県立といっても、福島市在住者が大半を占めている現状から、僅か2%にすぎないが、ブック・モバイルのサービスを行わない県立の場合は、その所在地の利用者は、ほぼこの程度の数字であるようである。もしこれ

らの数字を大幅にあげようとするなら、資料あるいはサービス方法に思い切った手を加えなければならない。利用者数、利用図書冊数、貸し出し登録者数の詳細な数字は〔表1・2・3〕のとおりである。

2 調査相談業務

図書館の上手な利用の仕方も一般に知られるようになり、調査研究のための利用が年々増大の一途をたどっている。その内容は、もちろん郷土福島県に関するものが、約半数を占めるが、特に電話による依頼が多くなっており、それらはまたコピーサービスを伴って、職員の仕事の量は著しく増大している。

また、相互貸借にしても、北日本図書館連盟が作った規程では、その郵送料は借り受け館が負担するものであったが、最近では国立国会図書館をはじめ、貸しだすときは自館持ちという傾向が多くなってきており、少なくとも県内図書館相互館においてはこうしたとりきめも改める時期に来ているものと思われる。

特許公報類も、公開公報の発行によって、急激に量が増え収納スペース、検索等頭を痛めている実情であり、古いものについては、保管方法、場所等をも、将来保存するにしても、効率的な配架措置を今から考慮しておかなければならない。→〔表4・5・6・7〕

3 展示会

郷土の生んだ作家、当館所蔵の豪華本、館報「あづま」の表紙に使用した作品も50回にも達したので、これらをたどってみることにし、3種の展示会を催した。

当館所蔵のもの、あるいは関係者の好意によって借用したもの等であったが、若松賤子、佐藤健等はあまり知られていない人たちでもあり、来館者の関心をさそった。

○ 館報「あづま」に見る名作のふるさと展
館報表紙の写真で紹介した本50余点を展示した。

○ 県立図書館所蔵豪華本展

「手渡和紙」	毎日新聞社	¥ 8 万
「煙霞帖」	浦上玉堂	〃 5 万
「江戸火消錦絵集」	岩崎書店	〃 2.4万 等

○ 高村智恵子資料展

生誕90年にあたるので、関係資料を展示した。

○ 若松賤子資料展

没後80年に当たる。会津若松市生まれ、英文学を学び「小公子」の訳者として有名。東京の磯崎氏、岩本記念館等からも協力をいただいた。またこの展示がきっかけとなり、今春「若松賤子」が出版された。

○ 佐藤健遺稿展

福島市笹谷の生まれ、旧制福島中学を卒業後、作家を志し、米国から欧州に遊学する。コクトー、ジョイス等とも交友があり、作品は未発表のままに終わっているが、彼等からの書翰等が目をはいた。

○ 野口英世伝記展

生誕100年に当たり、出版されている伝記50余展を展示した。また民報連載の北篤「野口英世」の原稿をも展示させてもらった。